

2022年度 第3回須坂市小中学校適正規模等審議会 会議録

○日時 2022年9月27日 15:00～17:00

○場所 旧上高井郡役所2階多目的ホール1

○出席者

【審議会委員】

勝山幸則会長、荒井英治郎副会長、本多健一委員、有地康晃委員、新野健委員
牧富士男委員、奥原利広委員、古平幸正委員、戸松清一郎委員、島田浩幸委員
佐藤富美子委員、西原秀明委員、垂澤優樹委員、宮川浩委員、牧奈穂美委員
北森ちか委員、清水貴夫委員

【事務局】

小林教育長、清水教育次長、中村学校教育課長、安川係長、後藤主任指導主事
北村指導主事

1 開会

2 あいさつ

会長：

●本日は、前回の審議会で各グループから出た意見を全員で振り返り、また過日、委員に参加いただいた市内小中学校の視察の感想も含めて、これからの審議会の議論の進め方について意見を出し合っていきたい。

3 議事

(1)第2回審議会の各グループの主な意見

学校教育課長：

●テーマ1「多様性を受け入れる支援のあり方」では、主な意見として「学校における多様性多様性とは何か。学校教育で考慮すべき多様性の中身を吟味する必要がある」や「多様性を包み込むには、学校だけでなく保護者や地域の共通した見方の醸成が必要」「自分の居場所や活動場所の選択等、様々な選択や解決方法を見出すことができるようにする。学校を固定しない」という意見があった。

●テーマ2「学校と地域の関係」では、「地域も学校に関わりたいと思っている。学校も地域が学校に関わって欲しいという気持ちがある」という相思相愛の意見があった。

●「コロナ禍で学校と地域の関わりが途切れてしまったことのダメージは大きい」や「子どもは思いのほか、地域の良さを知らない。積極的に地域と関わる必要がある」「地域や企業は、教える体験をすることで、自分の仕事を見つめ直す機会となる」「地域の中に子どもの学びの環境をつくる。学校は大人にとっての学校でもある」等の意見があった。

●テーマ3「小規模校におけるメリット・デメリット」では、メリットとして「丁寧に子どもを見ることができる」「小さくても学校があることが、地域の核になる」等の意見があった。

●デメリットとして「適正な人数や規模は、子どもの成長によっても違う。一律に線引き

をしてしまうことに疑問を感じる」との意見があった。

●「大人の手が入り過ぎると、子どもの自立を妨げる」との意見があった。これはメリットの「丁寧に子供を見ることが出来る」という部分が、逆にデメリットにもなり得えるとの意見である。

●他にも「教員一人への負担が大きい。多様な教師と会えない」の意見があり、先生方に依存してしまうことや、多様性を心配する意見があった。

会長：

●テーマにある多様性とは、学校という学びの場が、どの子にとっても充実したものであるために多様性という言葉を使っている。

●地域と学校との関係は、学びのエリアを学校だけではなく、地域も含めて包括的に学びを作っていくということが含まれている。

●小規模校のメリット・デメリットについては、この審議会の大きな使命であり、少子化の中での現状の問題であると捉えている。

委員A：

●多様性について、学校では色々な子ども達が活きるように一生懸命取り組んでいる。

●学校の規模に関係なく、1人1人が認められ、成長していく場であって欲しい。

●小規模校については、メリットを生かしながらデメリットをどう解決していくか考えて行く必要がある。

委員B

●多様性には2つ意味がある。1つは教員が多様な価値観を持って、子どもに接していくこと。家庭も複雑であり、指導も変わっていかねばならない。

●もう1つ多様性は、1人の教員だけでは、多様性を包み込むには限界があるということ。学校の規模に関わらず、教員の数の確保をしていかないと、多様性には対応できない。

●小規模校は、小学校の関係のまま中学校に来て、子ども達だけでは多様性が生まれにくい。その場合には、色々な教師と出会って、学んでいくことが必要で、小規模校でも教員の数が必要である。

●ただし、教員配置には現実的な問題として、予算的な問題がある。したがって、多様性を考えるときには、学校規模も含めて検討しなければいけない。

委員C：

●小規模校の当事者として感じていることは、グループ意見にもあった「専門性を持った教師が配置できない」ということが、中学校では致命的で苦しいところ。

●小規模校のメリットはあるが、それはそもそも専門性をもった教員が配置できることが前提でなければ、成り立たない部分もある。

委員D：

●生徒数が少ないということは、教員の数も少ないということ。教員は担任や他の分掌の仕事をもって、それぞれの手一杯の状況の中でやっている状況で、色々なことが起きたとき

に丁寧に対応できない。

●生徒が少ないと、子ども達に目が届くと思いがちだが、教員が少ないと意外と手が入りにくいというのが現実。

●象徴的なのは、小規模校ではグラウンドやテニスコートに草が生えている様子があった。子どもが少ない学校ほど、施設は相変わらず大きいので、とても手が回らない状況がある。

●今年、ある中学で試算に対して、実際に入学した1年生が30人少なかったということがあった。須崎市から長野市等へ生徒が流れている現状がある。理由は分からないが、大きい集団の中で学ばせたいという保護者がいるのではないか。

●多様性が要請されるのは、世界が多様性に満ちていて、その世界に子ども達は飛び込んでいかなきゃいけない。狭い価値観の中にいると、多様な価値観の世界の中で立ち行かなくなる。

●小さな学校では、教員の確保が難しいので、1人の教員が多様な価値観を児童生徒に提示することは不可能。多様な価値観、異質な文化に触れる機会が減ってしまう。

●ただし、集団は大きければよいわけではなく、成長に応じた集団の大きさがある。

●小さな集団の中で人間関係が崩れたときに、修復が困難になる。小さな集団では、兄や姉、いとこ、隣のクラスの先生、違う学年の先生とか斜めの関係が生まれにくい。固定化された人間関係の中で生きていくのは閉塞感があると感じる。

(2)市内小中学校の視察を終えて意見交換

委員E：

●豊丘小学校を視察して、施設の管理運営に苦勞しているとお聞きした。例えば、プールや校庭は小さい学校も大きい学校も同じような大きさであり管理が大変。

●授業参加では7人の学級を見学。一目で全体を掌握できる印象。一番多い14人の学級でも同様であった。

●適正規模という点では、20から30人がクラスの体裁としてよいと感じた。

委員F：

●私は豊丘小学校、東中学校の出身。

●相森中学校を見で、私の出身校と比べると人数が多いと感じた。ただ、人数が多いからよいとは思わない。

●視察を通じて、先生が足りないという意見を一番聞いた。

●地域として、子ども達の通学を見守ることはできる。しかし、学校の勉強という点では地域は何もできないと感じた。

●豊丘小学校の視察では、2年の1クラス7人、全てが女子児童という状況をみた。少人数だとこういうこともあり得ると感じた。

●特別に支援が必要な児童生徒がこれからも増えてくると聞いた。それに対応して、先生も必要になると思う。先生のことこのからの審議の中で考えていく必要がある。

●区長という立場でこの審議会に参加している。小さくても学校があるということは、地域の核になると考えている。

委員G：

- 審議会での議論のポイントは、学校の規模とクラスの人数を検討すること。
- 小規模校にはデメリットしかないのかなと考えていたが、決してそんなことはなく、小規模のなりのメリットがあると感じた。
- 学校の規模について、子ども達にとってどうなのか、また地域にとって、先生方にとってどうなのか、この3点から考える必要もあると感じた。
- 子どもの数が多くなるから、少なくなるからではなく、子ども達にとっての最適な学びのあり方を建設的に検討したい。

委員H：

- 豊丘小学校を視察したが、授業を受けるという点では、小規模校のデメリットを感じることはなかった。
- 児童数に対して先生が配置される根本的なルールがボトルネックになっている。児童が少ないから先生を配置できないことに対して、大人たちがどれほど危機感をもっているのか。

委員I：

- 豊洲小学校の算数の授業で自由進度学習を見学した。子どもが学習方法を選べることに驚いた。
- 子どもからみた多様性とはどういうことか。学校の規模が大きい方がよいか、小さい方がよいか、子どもの意見を聞くのも大切だと感じた。

委員A：

- 小山小学校のすぐ前に住んでいながら、須坂小学校へ通う児童がいるという具体的話を聞いた。学区についても課題として検討する必要がある。

委員J：

- 教員は平日にできるだけ生徒たちの方に向き合いながら、それ以外のところでこれからの授業をどう作るかというところを考えている。
- 学校には様々な児童生徒たちが通っている。なかなか教室に入れない子もいる。その子たちが自分の居場所を求めて様々な校内の場所にいる。そのときに誰がその子ども達のケアをするかっていうところは、なかなか難しい面がある。

委員K：

- 1つのクラスの中で自分と気の合う友達作りができることが大切。授業の分からない点を話したり、登下校の時間を一緒に過ごしたり、自分と気の合う友達が作れる人数として、30人以上が必要ではないかと感じた。

委員L：

- 子どもたちの学びに対して、大きいからよいか、小さいから駄目だというような少し大人目線での考え方が多いのではないかと感じた。

●ただし、そうは言っても子ども達に色々な機会を作ってあげることが大人の役目。それぞれの環境で工夫をしながら、新たな視点で可能性を導き出していくことが必要。

委員M：

●小学校3年の子どもがいるので保護者の視点も含めて、教職員不足の問題を心配している。心にゆとりがないと子供たち一人一人に丁寧な関わりができないと感じる。

●自分の子どもが通う小学校は人数が多い。担任の先生の話では、学年が上がると学力に差が出てくるが、人数が多い分、どうしても目が行き届かないことがあると聞いている。

●クラスは30人弱で、良いことも悪いことも含めて、いろいろな考えの子がいる中で成長している。色々な方と触れ合う機会は大事だと感じる。

●そうしたことが学校で難しいのであれば、家庭や地域と連携した繋がりがあればよいと感じた。

会長：

●今の意見は、学びの場を学校に止めないという視点の意見で重要な点である。

委員N：

●教員の配置基準が変えられないとすれば、色々な工夫をする必要がある。

●いじめや不登校の問題も考えながら学校規模を考えたい。

委員O：

●自分の子どものことだが、人前にでると中々話ができない状況があり、小学校入学後に不登校になるのではないかと心配していた。しかし、今では友だちと仲良く下校する姿を見ることができる。一方で、別の子は、中学3年で友だちとトラブルがあり、同じ高校に行きたくないということで長野の高校に進学した。

●子どもには順応性があり、学校の規模が大きくても小さくても学校に馴染んでいく。学校は子ども達が社会に出て荒波に揉まれた時の順応性を身につける場所でもある。子供の順応性に任せることも大事。

委員B：

●規模を人数だけで測るのは難しい面があるが、中学では教科数は絶対数が決まっている。例えば、音楽の先生いなければ全く音楽が教えられないということになる。

●教員配置はクラス数で決まってくるので、子供が減り1クラス減ると教員が2人減ることになる。クラス数と教員数は連動している。教員の確保ということでは、クラス数という規模の問題は大変重要になる。

●昔は部活動ではレギュラーになるのは大変だったが、今は人数がないためチームを作るのも大変な状況。合同チーム作り、他の中学から人を借りてチームを作っている状況がある。

●子ども達に色々なスポーツの選択肢を設けようとするならば、教員や指導者も必要になり、やはり学校規模の課題が出てくる。

(3) 市民・保護者・教職員・児童生徒アンケートについて

学校教育課教育政策係長：

- 市民・保護者・教職員・児童生徒アンケートの調査方法、調査内容について説明。

(4) 市民・保護者・教職員・児童生徒アンケートについて意見交換

委員 G：

- 1点目、アンケート結果は一般市民にも公表するのか。2点目、児童生徒はアンケートを学校と家庭のどちらで回答するのか。3点目、児童生徒のアンケート項目が市民や保護者アンケートと比べて少ないと感じる。例えば、他の通学区からも入学できる制度拡大（特認校制度）を子ども達にも尋ねてみてはどうか。

学校教育課教育政策係長：

- アンケート結果は審議会でも共有し、市民にも公表していく。2点目、アンケートの回答時に児童生徒の質問等に対応するため、先生がいる状況で回答するを想定している。3点目、設問の追加については事務局で検討する。

委員 I：

- 児童生徒アンケートの学級数を尋ねる質問で「4学級以上がよい」との選択肢があるが、現実的に4学級以上の体制に成りえる可能性があるか。

学校教育課課長

- 実際にそのよう学級数にするかどうかは今後の話だが、可能性としてないとは言えない。アンケートは、自分たちの学校と比べながら、クラス数がどの程度であって欲しいと考えているかを聞きたい。市民や保護者にも同じ質問をしているので、それとの比較もみていきたい。

教育長：

- 学校と地域の関係について、前回の意見交換で「地域や企業は教える体験をすることで自分の仕事を見つめ直す機会となる」との意見があった。これは地域と学校がウィンウィンの関係であることがこれからは大事であるという意見。
- 今までの地域の行事に参加して、大人の姿を子供たちが見ながら学んでいくというのは、これからもできればよいが、徐々にそういう体験が少なくなっていく中で、地域と学校はこれからどういう関係性を持っていったらよいのかということ考えた時に、学校規模や学区についてもこれからの議論に加えていただきたい。

副会長：

- 学校と地域との関係では、これだけ少子化が進行している中で、地域というものを地区と捉えることに限界がきている。
- 須崎市全体として子どもを支えるという捉え方をする。地域の方々が学校を支えていく

場合には、この地区に住んでいるので、この学校だけを支えるというスケールだと成り立たなくなる。

●こういう関わり方だったら自分は学校にサポートできるという方法があれば、地域の皆さんが協力をして、その地区の中の学校ではなくても、協力していくということが必要になる。

●関わり方として、学校は地域に勉強を教えることだけを求めているわけではない。学校の支え方は色々ある。例えば、学校の草取りをすることも学校にととしては有難いこと。

●コミュニティスクールの場合でも、学校が何を求めて、地域でどんなことができるのかということを検討していく必要がある。

●子供の数が少ない、クラスの数が少ないということは、現状のルールでは教員の数が少なくなるということ。このことは残念ながら今すぐには変わらない現実。

●子供の数が少ないからといって、教員の仕事の量が楽になっているわけではない。

●子供の数が少ないからといって子供に目が届くというのも、必ずしもイコールではない。

●委員皆さんの意見として、子供の個性の多様さをきちんと包み込んでいくこと、そして指導者や支援者の多様性というのも多様な子供を包み込んでいくために大事であるという点は一致している。

●子どもの数が少なくなると教員の数も少なくなるが、どんな学校であれ、子供の多様性を認めて、多様な教員集団で関わっていく、地域も含めて関わっていくということは、ぶれない視点として今後大事にしていく必要がある。

●子供の視点もすごく大事。子供自身では多様な学びを作る機会を作れないので、そこは大人の責任。

●市民アンケートの調査は、市民の内 800 人を抽出し、さらにその中から回答いただける方はさらに少ないことになる。ここでの結果が全てだとは思ってはいけない。

●保護者アンケートでも、子どもが通う学校によって保護者の答えも変わるので、結果の見方も変わってくる。

4 次回内容について

・第4回審議会 11月24日(木)15~17時 旧上高井郡役所

5 その他

・第1回シンポジウム 11月27日(日)14~15時30分 旧上高井郡役所

6 閉会